三池の誇りを胸に進む

命を尊重する政治の確立へ

手記

参議院議員　阿具根　登

三池労組創立30周年記念集会閉幕後、全参加者は本社（三池鉱業所）前までデモしたが、その日細谷代議士らとともに先頭に立つた阿具根登参議院議員の元気な姿。やつぱり三池の労働者だ。

福岡県大牟田市は私が生まれ育ち、そして三池の炭鉱夫としてほんとうに厳しい労働と生活に耐えながら、この間軍隊生活をも経験し、戦後は労働運動に身を投じて、組合長として、三池の仲間とともに力いっぱい、貧しさからの解放を叫んで闘った。この生いたちから、「生命の尊さ」を身をもって体験し、昭和二十二年から大牟田市議会議員、さらに福岡県議会議員、そして二十八年からは参議院議員と、都合三十年をこえる私が歩んだ政治の道は、すべてが働く者の強い志と、血のにじむような努力の賜であり、そこにこそ私の「今日」がある。

三池で培った、「貧乏を追放し、生命を尊重する政治の確立」をめざす、これまで一貫してつらぬいてきたこの政治課題と信条は、今後も変らず追及していく以外にない。

以上のことは、厳しく、苦しかったこの度のダブル選挙を闘い抜き、五回目の当選を果たし得た報を耳にしたとき、瞬間私の脳裡をよぎった回想だった。

「今日の阿具根」を生んだ三池の仲間に対する感謝の念を、どうして禁じ得よう。

今わが国は、野党勢力の後退という選挙結果から、政治情勢に、当然いっそうの激動が予測されている。たとえこれからどんな困難な事態に直面しようと私はこの「強大な誇り」をしっかりと胸に刻みながら突きすすんでいく決意でいる。

これからの日本を支えるのは結局は額に汗し、土と泡にまみれながら働く仲間であり、農・商・漁民の仲間であることを、政治の原点に見据えるとき、も早や私にこわいものはない。こんな仲間の皆さんの意志を継いでがんばるのみだ。はるかに三池を思いながら、あえて決意している。

×

筆者は、日本社会党副委員長

▽

▽

長崎大会への参加など

今年も原水禁運動へ

三池労組はこのほど、近づいてきた今年の世界大会を中心とする原水爆禁止運動を、「政府・自民党の軍事国家再建の動きを封じるためにも、平和を守る」覚悟をもって取り組むことをきめた。

去年のこの運動のなかで開かれた国際会議や、統一原水禁世界大会の成功などが力となり、政府もやっと重い腰をあげて〝被爆者援護法の制度化〟に取りかかった。被爆者基本問題懇談会を発足させ一年間の期限つきでその答申を求めている。

だが一方では周知のように、防衛力の増強意図をむき出しにしており、重大な情勢をつくり出している。

このようななかで原水禁運動に取り組むが、ほぼ次のようなことをきめ周知徹底をはかっている。

一、きたる八月六・九日の広島と長崎の被爆時に黙禱。

二、カンパ活動を取り組む。

三、平和行進と市民集会に参加する。

四、長崎の世界大会に参加する。

なお、以上は大牟田と荒尾の両計画を同様に協力していく。

短歌　選挙前後

三川指導部　町　佳郎

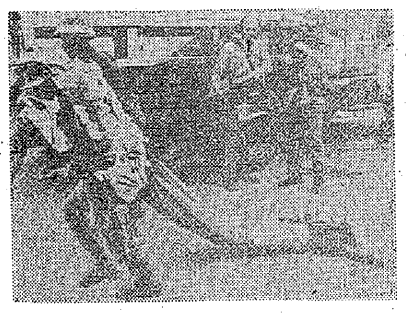
しょうぶ園観に来しついでにと袋一杯の季節の作物友持ち来たり
くわがたのいまだ来ぬかと隣家（となりや）の子はわが庭の樫見上げおり
父の日の絵のコンクールに入賞せし子はわれの帰りを待ちかまえいし
わが家の近くに止まりし選挙カーのやがて金権腐敗を糺弾しはじむ
叫びつつわが家の前を過（よ）ぎりゆく選挙カーに手を振る吾子のふたりは
開票を眼（まなこ）こらして見る朝げ保革逆転は見事潰（つい）え去りたり
革新の敗北のニュース聞きいしがやがて作業場のひそまりゆきぬ
掴み得ざりし連合政権を砂上の楼閣と聞きつつむなしいく色のペチニヤの咲くわが庭のさつきもおおかたは終りを告げぬ
さし芽にと同僚（とも）の持ち来しあじさいのあざやかなれば切りがたきかな

韓国の民主化闘争に

連帯と支援を

韓国の光州での人民蜂起と弾圧（五月十九日）のすさまじさについてはだれ知らぬ者もなく、今世界各国から、同国の民主化の前に新たに立ちふさがる全斗煥政権に非難の矢が集中している。

次は〝労働ニュース〟（総評七月二日発行）が「無差別虐殺と市民総決起の状況を克明につづった貴重な証言」として伝えた、一韓国人キリスト教徒の手記の一節。私たちは人間の名において、できる方法で同国人民の民主化闘争に、連帯と支援をおくろうではないか。



死者の体を、街路でひきずり回してもてあそぶ韓国戒厳軍。

なかま

三川指導部

井上　幸男さん

▼…早口でポンポンしゃべり常に職場に笑いをまき起こす友情心あつい、保線仕繰の井上幸男さん。仲間は、ユキしゃんの愛称で呼ぶ。

子どもの頃、近所の捕鯨船の機関長にあこがれ、十六歳で海軍に志願。輝く十字星の下、台湾や南洋を航海。ロマンの青春期を過ごし、太平洋戦争終戦後は一転米艦に乗り込んで引揚げ業務へ。復員の戦友や海外引揚げ者を母国に、また母国で待つ妻子のもとへおくりとどけた。友情、愛情、生きることの尊さを今さらながらかみしめたという、三級機関士の肩書をもつ海の男。

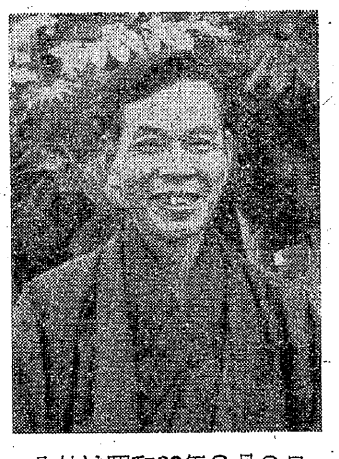
▼…家庭の事情で、今は炭鉱（やま）の男として海の底で働く。あつい友情心、人一倍強い命を守る気概の強いのは、きっと復員業務に働いていた尊い経験のなすところか。「組合運動の理屈はわからないが、命だけは守らねば……。それだけだ」と断言するユキしゃん。

▼…趣味のないところが趣味とでもいうか、酒がはいれば踊りもし、人情にもろい一面も……。すでに三人の娘さんも嫁ぎ孫が五人。

今は、長い坑内労働で腰を痛めている夫の身を案じながら、内職で家計をささえる妻のよしのさんに、末娘と三人暮らし。ほかに、アヒル夫婦もいて、その卵はいつも職場の仲間がご馳走になる。

来年の八月が定年。がんばれユキちゃん。

（三川＝弓掛隆人・記）



入社は昭和22年6月2日
荒尾市原万田、妙見社宅77棟に住む。妻・末娘と3人暮らし。

妊婦の腹を裂く剣

腹を裂きひき出す胎児

血を呼んだ光州の大弾圧

この時、避難もできずにいた七十歳くらいのおじいさんの後頭部に空てい兵の鉄槌が打ち降ろされるや、口と頭からは噴水のような鮮血がほとばしり出て、老人は悲鳴をあげるひまもなくバタッと倒れた。

二人の空てい兵に、犬みたいに引きずられてきた女の人は臨月に近い妊産婦であった。「このアマ袋に入っているのは何だ」、私は何を問うているのかわからず、彼女の手を見つめたが、手には何もなく、何かを入れるような袋も見えなかった。

「このアマ！　わからんのか？　男か、女か？」。横にいた奴がせき立てているのを見て、私ははじめて何をいっているのかがわかった。女の人のいっている声は聞きとうてい信じられず、あり得ようのないこの凄惨な現場を目撃していた人々は、皆同じように首をふり、身震いしながら歯ぎしりしした。

娘たちの背中にも

ある路地を抜け、大通りの前で取れなかったが、何なのかわからないという素ぶりであった。「それじゃわからせてやろう」、彼女が抵抗する間もなく着物をつかむや引き裂いた。ワンピースが引き裂かれ肌が露になった。空てい兵は、帯剣で彼女の腹をぐさっと刺した。えぐって刺したのか、すぐに腸がとび出した。奴らは、ふたたびその彼女の下腹を刺して胎児を引き出して、まだ息をしている彼女に胎児を投げつけた。

私はびくっと立ちどまった。同じ言語を使用し、同じ国籍を持ったわが国の人間だというのか。女子大生らしい三人の娘さんが、空てい兵によって徐々に裸にされていた。ブラジャーとパンティまで全部引き裂き、そのなかでもっとも悪どい顔をした空てい兵が軍靴で娘の尻を蹴とばしながら、「早く消え失せろ！　このアマが。今がどんな時だと思って騒ぐのか」と怒り狂う狼みたいにいった。しかしどうしたことか娘たちは逃げるのではなく、胸をだいて道ばたに座り込んでしまった。この時一人が叫んだ。

「こいつら命が惜しくないようだ。それなら仕方ない」その瞬間、娘たちの背中には帯剣が同じように刺され、噴水のように血がほとばしった。倒れた娘たちの胸に帯剣で×印を書き、生死の確認もしないで清掃車に投げ込んでしまった。